

遺棄から埋没まで

——弥生土器の原位置論的分析——

富井 眞

1 はじめに

遺跡出土の遺物を回収するに当たって、出土状態の記録をとることは非常に重要な作業である。出土情報の必要性を訴えた130年以上前のピットリヴァーズの功績は無論としても、その後の日本での研究でも原位置情報の収集は、麻生優の先史時代遺跡での実践を転機として加藤晋平・宇田川洋の近世遺跡での調査などを経て、時代を問わず遺跡全般で効力をもつことが示されたが、こうした原位置情報を基にして遺物の遺存状態や接合関係などを調べることによって、遺跡の形成過程や当時の人の行動まで推察が可能になることは、先学の数多くの分析結果が物語っている⁽¹⁾。しかしその一方で、墓などのように遺構の性格が容易に限定できる場合には、かえって遺物の出土状態の検証が不十分になることもあり、また、一般に出土資料の時代背景などに対する関心が強過ぎるせいも、遺物については原位置情報は閑却が許されて、出土状態に左右されない内包的情報が偏重されることも少なくない。そして、後者の場合の遺物そのものの内包的特徴についても、使用時点の痕跡が指摘されることもあるが多くは製作時点の痕跡の抽出にとどまり、破損の痕跡はあまり注目されず、従って廃棄の理由も推測されにくい。

本論では、流路際の斜面で出土した弥生時代の土器一個体を題材として、遺物の出土状態に関するいわば状況証拠と、遺物そのものに関するいわば物的証拠とを基に、過去の人間行動の復原を試行する。その手順として、まずはじめに遺跡とその周辺について概観をする。ついで、対象とする弥生土器の遺棄から埋没にいたるまでの様相を、遺構の堆積環境、遺物の内包的情報、遺物の原位置情報の三つの視点からそれぞれ分析・検討する。そして最後に、この土器の利用の最終時点の場面の復原、すなわち過去の人間の具体行動の一端の復原を試みる。

本論の目的は、考古学を軸とした過去の人間行動学が、過去の一場面（いつ、どこで、なにを、だれが、なぜ、どうした）をいかに具体的に復原し得るか、その論理的道筋を示すことにある。これを契機に、復原されたこの具体場面の是非だけでなく、考古学的研究の実践方法の意義や可能性についても議論が深まれば幸いである。

2 遺跡の概要と作業の方針

(1) 遺跡の位置と遺構の概要 (図163)

対象となる資料は、京都市左京区の北白川追分町遺跡から出土した弥生時代中期末（第Ⅳ様式末：約2000年前）の壺形土器一個体であり、この時の調査については既に報告がある⁽²⁾。遺跡は、東方の比叡山地南部から西流してきた白川の形成した北白川扇状地の西端近くに位置しているが、この北白川追分町遺跡では、同時期の明確な資料はほとんどまったく確認されていない。周辺に位置する第Ⅳ様式から第Ⅴ様式にかけての遺跡は⁽³⁾、1 km 南西の現在の鴨川左岸に、大型の土器片がコンテナ1箱ほど出土している吉田山西麓遺跡があり、2 km南方の現在の白川右岸に、方形周溝墓も確認されている岡崎遺跡がある。このように、北白川追分町遺跡よりも下流に位置する地域には同時期の遺跡が知られているが、上流に位置する、白川の上中流域や谷出口、あるいはかつての白川に合流する辺りとなる現在の高野川下流域左岸には、当該期の資料はほとんど見つからない。

本論で扱うのは、黄色砂からなる白川弥生土石流堆積層を削り去って西流した白川によって形成された東西方向の窪地の、北肩に堆積したシルト質土中で検出された土器片集中部である。土器片の広がり、楕円形状で、窪地に平行する東西軸は約1.5m、窪地への南下がりの傾斜に平行する南北軸は約1.0mをはかる。以下、この集中部を、調査記号と既に報告された遺構記号とを併せて、「K S00 S X 5」、あるいは「S X 5」と呼ぶ。

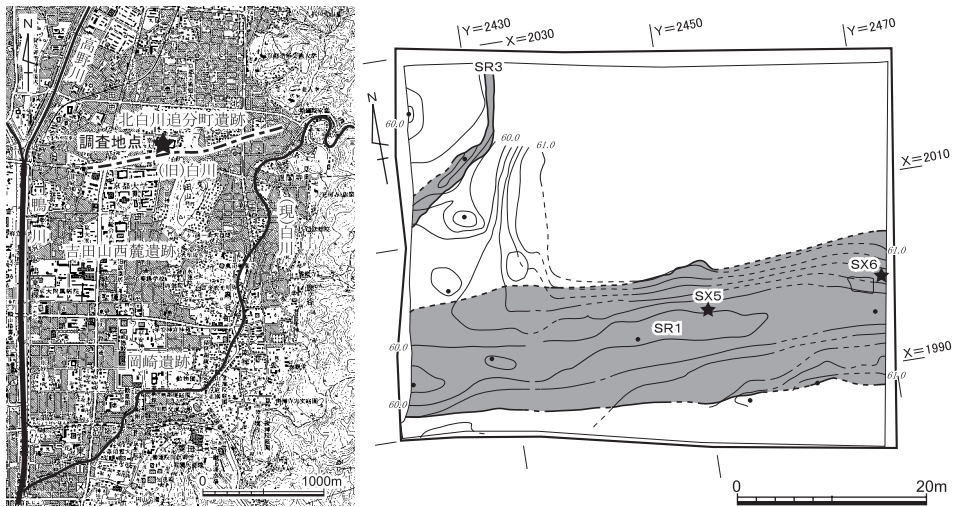


図163 遺跡と遺構の位置 (左：縮尺1/6万, 右：縮尺1/800)

(2) 分析の方法と作業の方針

土器片は、シルト質土の上面では確認できず、掘削中に検出された。土器片が出土し始めてからは竹ベラで丁寧に掘り下げ、また土器片の集中部の周囲も精査して遺構検出に努めたが、掘り込み状の遺構は確認されなかった。回収された土器片の点数は約150だが、遺物の存在に留意しながらの掘削をおこないかつ破片の存在を確認してからは丁寧に掘り下げているので、回収し損なった破片はごくわずかと言える。このうちの126点については出土時の三次元的な原位置情報を記録し、その多くについて、調査中の記録写真を基に、出土時の表裏の向きや破片の口縁側が指していた方位などを確かめた。また、原位置情報のない破片8点も含めて、部位の同定や長軸の計測のほかに、接合に先行して、器表面や破断面の摩滅程度の相対評価、付着物および剝離部の有無など、幾つかの観察項目を設けて破片の状態を記録し、接合に際しては接着断面の接着程度も相対評価した⁽⁴⁾。

一個体の弥生中期末の壺形土器が単独で残存率も比較的高い状態で掘り込みもない斜面水際から出土した、ということは通常の考古学的調査から導き出せるにしても、この遺構がどのように形成されたのか、つまりなぜこの土器が割れ、そしてどのように残されたのか、ということ解釈するためには、堆積環境、出土状況、破片の特徴、割れる前の土器の素性などに関する情報を総合的に把握する必要がある。そこで次章からは、堆積環境、土器の破損に関わる製作・使用上の特徴と破片の特徴、破片の分布や接合関係や接合線の様相について、それぞれ検討していく。

3 堆 積 環 境

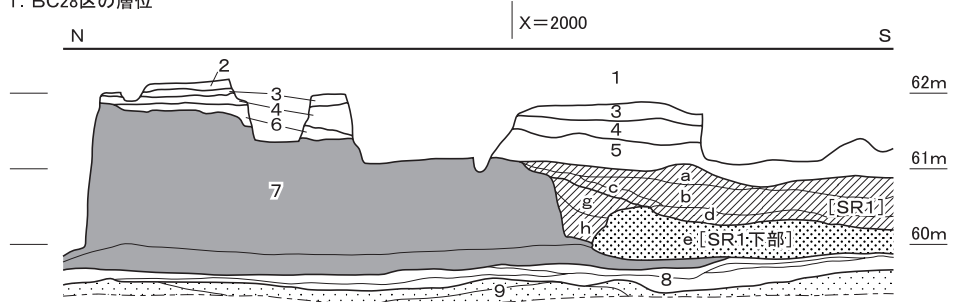
前章ではK S00 S X 5の周辺環境について概観したので、ここでは、より微視的な堆積環境について、堆積物の観察に基づいて検討していく。

(1) 白川について (図163・164)

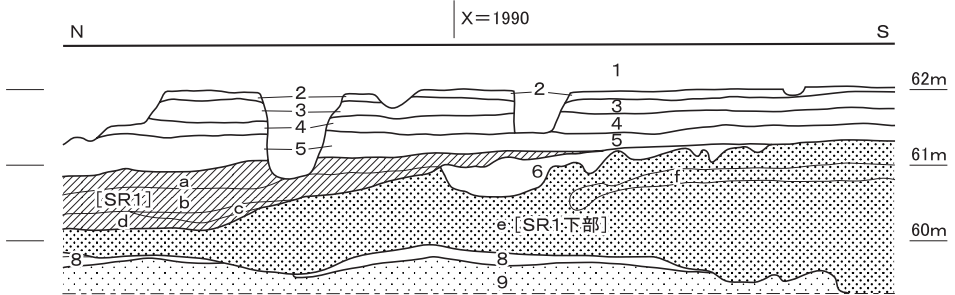
S X 5の土層は、水流に起源のある黄色シルト質土で、いわゆる斜面堆積の観を呈する(図164-1: g層)。しかし、ラミナも確認できず、径5mmに満たない花崗岩風化砂粒が散在し、径50~150mmほどの礫も稀にみられることから、通常の流水による水成堆積を思わせるような層相とはいえない。また、直上の層は土壌化の進んだ黒灰色の粘質土層、直下の層は灰白色のシルト質土で、これら3枚の地層には色調以外には基本的に相違点はないので、おそらく堆積環境はほぼ同一であったと考えられる。これらのシルト質土の下位ないしは斜面下方に堆積しているのは、拳大から小児頭大の礫を多く含む褐色砂礫層であ

遺棄から埋没まで

1. BC28区の層位

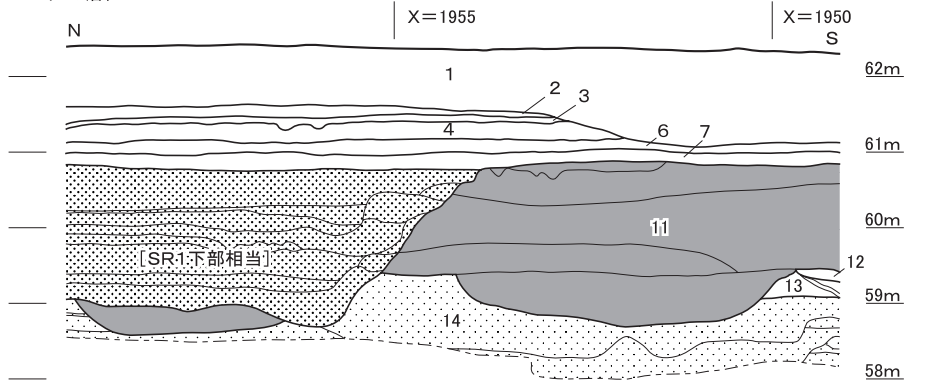


- | | | |
|---------|---------|----------------|
| 1 表土・攪乱 | 4 茶褐色土 | 7 黄色砂(白川弥生土石流) |
| 2 灰褐色土 | 5 灰茶褐色土 | 8 明褐色・明灰色シルト質土 |
| 3 黄褐色土 | 6 黒褐色土 | 9 白色砂 |



- [SR1内堆積層]
- | | | |
|---------------|----------|-----------------|
| a 灰茶褐色砂質土 | d 黒色粘質土 | g 黄色シルト(SX5検出層) |
| b 粗砂混じり黒褐色砂質土 | e 褐色砂礫 | h 灰白色シルト |
| c 黒灰色粘質土 | f 暗灰色シルト | |

2. BA28区の層位



- | | | |
|----------|--------------|-----------------|
| 1 表土・攪乱 | 4 灰褐色土II | 11 黄色砂(白川弥生土石流) |
| 2 灰褐色土I | 6 茶褐色土 | 12 黒褐色粘質土 |
| 3 灰赤褐色土I | 7 茶褐色混じり黄褐色土 | 13 暗褐色粘質土 |
| | | 14 白色砂 |
| | | 15 茶褐色砂礫 |



図164 SX5の検出層位と周辺の層位 縮尺1/100

る。この砂礫層は、地点によって層相が異なり一様には扱えないが、S X 5 周辺では、径 5 mm 以上の粗砂中に 50~150mm ほどの礫多数を緩く包含していて、礫のならば具合等も含めて判断する限りでは、一定の流量の水流による水成堆積の状況そのままを維持しているとは思えない。その一方で、S X 5 から東方へ 20m ほどの所では、この砂礫層に介在する径 5 mm 以下の粗砂層の中に、ラミナが発達した部分も確実に残存する。つまり、褐色砂礫層の中には白川の水成堆積がそのまま維持されている部分もある。以下、この褐色砂礫層全体を、既に報告された遺構記号に準拠して「S R 1 下部」と呼ぶ。

S R 1 下部の底面の標高を東西方向でみてみると、S X 5 南縁付近では 59.6m ほどであり、S X 5 の 20m 東で 59.8m をはかり 30m 西で 59.4m をはかるので、S R 1 下部は 50m につきわずか 0.4m 西に下がっていることになる。また、S R 1 下部の上面でみれば、S X 5 周辺の標高は 59.9m ほどであり、S X 5 出土土器片の標高の最も低い破片も 59.9m で同様の値を示す。しかし S R 1 下部の上面は、十数m 南方においては、標高 61.0m をはるかに超えるほどに、堤状に盛り上がった堆積をしている。

さらに南をみてみると、K S 00 S X 5（京都大学構内遺跡 B C 28 区）の南約 30m の B B 28 区で、同様の層順で標高 61.0m をはるかに超える、S R 1 下部に類似した砂礫層があるが⁽⁵⁾、この地点では白川弥生土石流堆積層とその砂礫層との見分けが難しい。しかし、K S 00 S X 5 の南約 50m の B A 28 区では（図 164-2）、S R 1 下部と同様の砂礫層が標高 61.0m ほどまでに達し、さらに、2m 余りの厚さをもつ白川弥生土石流堆積層が、その砂礫層をもたらしただ水流によって北側に傾斜しながら削り取られている⁽⁶⁾。以上より、ここでは、中間の様相は不確実な点が多いものの、S R 1 下部は、延べ約 50m の川幅で西方に流れた白川の痕跡と考えてみたい。

このかつての白川の流れは、北岸に近い S X 5 の東 20m ほどの所では、径 5 mm 前後の粗砂のラミナが発達した部分も残しており、南岸側では、土石流堆積砂の下位の土層さえも深さ 1 m 近く削って土石流堆積層上面の旧地表付近からみれば 2.5m 近くの深さまで（標高 58.5m ほど）浸食している。しかし、このようにして幅広くそして深く浸食した河道ではあるが、その横断面のわかる範囲から考えると、滞水と強い流れとを繰り返しながら軌道を移動させているようであり、常時 50m 幅の水流が流れていたとは思われない。むしろ、K S 00 S X 5 の辺りは、白川扇状地の傾斜変換点近くに位置することから⁽⁷⁾、白川の流れは、通常は伏流していて「水無川」のような状態か、流れていても「小川」程度だったかもしれない。

(2) 微地形について

SX5 周辺の地層が水成堆積そのままの状態を維持していないとすれば、SX5 は、恒常的な流水域ではなく、むしろ頻繁に水の及ぶ機会のある川岸近くと考えるべきであろう。つまり、KS00SX5 は、白川の水流が、総幅50mの河道の少なくとも北縁部分には常時は存在せず到大雨の時ぐらいにしかそこを走らないような、いわば放棄流路のような環境下に、すなわち、SX5 の数m南方の自然堤防状の礫堤の北側にできた東西方向に広がる後背湿地状の堆積環境下に形成された、土器集中部であると言えよう。

SX5 の土器片の分布から堆積環境を考えてみても、同様の推察が導き出せる。調査区を横断して広がるこのシルト質土層内全体でみれば、土器片の存在が局所的であるとともに、SX5 の広がり是集約的である。しかも、ほとんどシルトのみしか堆積させていない程度の水流には、これらの土器片を運んでくる営力はない。これらのことは、土器片が原位置を損なっている可能性を否定しよう⁽⁸⁾。その一方で、シルト質土中に確認されたSX5 の周辺で、出土土器片とSR1下部の上面が標高を同じくしている。こうした状況から、KS00SX5 は、湿地のような非恒常的流水域のなかでも、例えば、わずかな出水でも寄せ波の来るような、正に水際のような環境が想定できる。

以上の堆積環境についての検討を承け、破片となった遺物そのものの出土状況の説明をして詳しく状況証拠を分析していくが、その前に、破片それぞれの特質についての理解を助けるために、次章では遺物そのものについての物的証拠の記述をおこなう。

4 遺物の特徴

本章では、遺物が内包する情報、すなわち遺物が製作され始めてから破片になって遺棄される直前までの物的特徴について、製作・使用・破損のそれぞれの段階でそなわった破損に関わる要素を中心に、その段階順に検討・説明していく(図165~168)。

(1) 製作に関して

まず、本論での破片の部位名称について、口縁から順に説明する。端部がなくとも受け口状の側面があれば、口縁部とみなす。口縁



図165 SX5 出土土器 縮尺1/6

遺物の特徴

端部を含まずに最もくびれる部分が含まれるものを頸部とする。最もくびれる部分までは達しないが頸部付近のナデが認められるものを胴上部とする。外面に斜めハケが施される部分は胴部とする。胴部のうち、特に、胴部最大径以下のハケメ部で器壁の薄い部分を胴下半部とし、最大径付近を胴中央部とする場合もある。接地部はないが底部近くの内面調整が見られ器壁が厚みをもつものを底部付近とする。接地部があるものを底部とする⁽⁹⁾。

続いて、既往の報告を踏まえつつ⁽¹⁰⁾、主に製作技術などに関して、本論に関わる点をやや細かく説明する。出土した土器の口径は26cm、胴部最大径32cm、底径4.5cm、器高36cmをはかり、残存率は、口縁ではおよそ100%に近いが底部では50%程である(図165・166)。

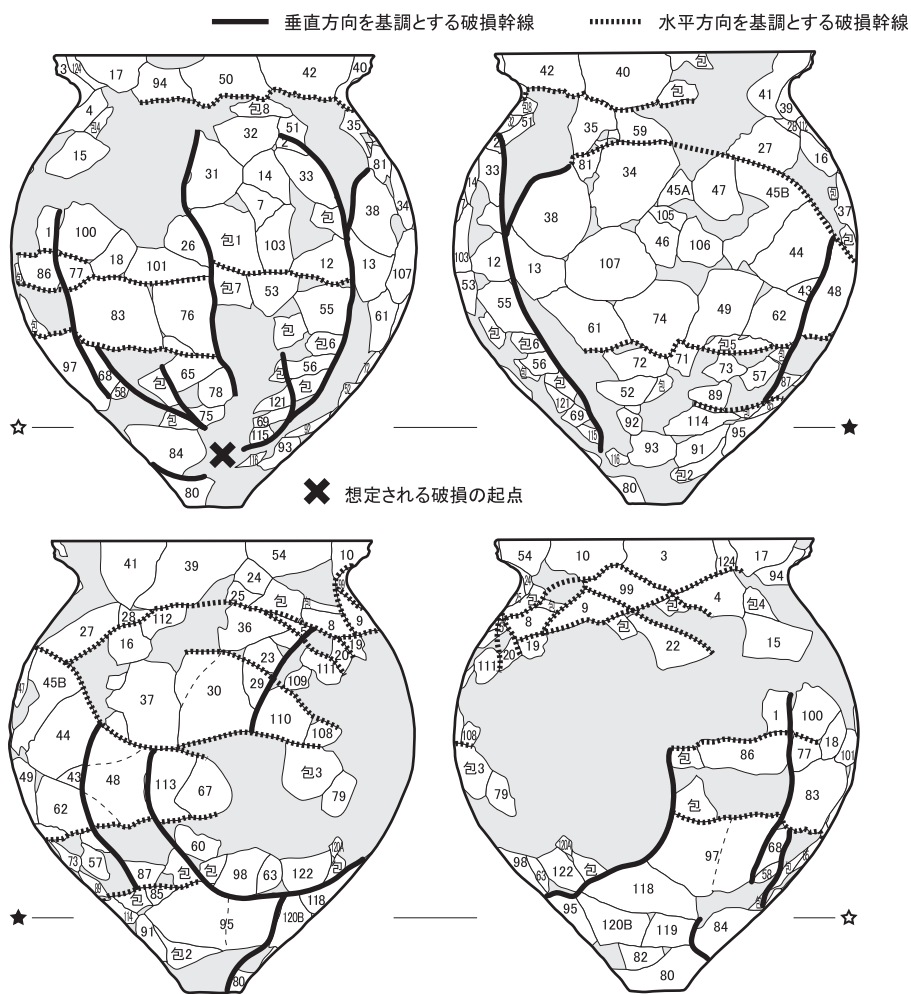


図166 出土土器片の接合のしかたと破損線（数字は破片番号） 縮尺1/6

胴部には欠損面積が大きい部分があるけれども、胴下半部では、接合できない20点ほどの破片も含めれば残存率は胴部の中でも高い。全体の残存率はおよそ70%程であろうか。器厚は、胴下半部が薄く、最も薄い部分では4mm程であるが、その他の部位ではおよそ6～7mmである。口縁の断面形態は受け口状で、口縁端部外面の強くつまんだナデによって凹線が痕跡的に表現されている。

底部の成形は、円盤充填技法によるものと思われ、円盤と底部付近とを補強するべく底部周辺にも粘土が付加され、凹底になっている。底部の接地部（以下、便宜的に「畳付」と呼ぶ）の調整が、底裏面のナデに被さっていて、畳付外面には幅の細い刻みが巡るので、円盤充填後に土器を逆位にして底部の最終調整をおこなったことがわかる。このように、底部は素地粘土の接着を入念におこなっている。器体の内面調整は、底部はナデで、胴下半部から胴上部にかけてはハケメが施され、その方向はそれぞれ、胴部最大径以下の胴下半部は鉛直方向、胴上半は内面に向かって左上がり、頸部・口縁の調整は横方向のナデである。外面は、底部はナデが残る部分もあるが基調としては向かって左上がりのハケメが施され、胴下半部はおよそ鉛直方向のハケメ、胴上半は外面に向かって左上がりのハケメ、頸部から口縁にかけてはナデであり、頸部ではハケメがナデに切られている部分がある（破片番号8・36。以下、個別破片については〇〇番と呼ぶ）。こうした特徴から、この土器は、第Ⅳ様式の終わり頃の壺形土器と言える。

胴部最大径部分をやや下がった辺りでまだ器壁の厚い部分の外面には、器壁の薄い胴下半部の器表面とは異なる色調の粘土が、胴下半部に覆い被さるようにして、溜まりのような1mm以下の段差をもちながら巡っており（図167-1）、さらに、主にこの段差の下位には、ゲル状の粘土を塗りつけたような飛沫がしばしば見られ、これらによって、例えば55番の外面では、灰黄色（2.5Y7/2）のキャンバスににぶい橙色（7.5YR6/4）の泥滴が底部に向かって垂れた観を呈している（同2：矢印）。また、この段差の直上1cm前後では2～3mmの砂粒が5～10%の面積比を占めながら口縁方向に5mm程度移動している箇所が多数見られ、下から上へのケズリ状痕跡となっている（同3）。こうした諸痕跡のうちで、飛沫の上にはハケメが認められることがある（同4：矢印）。ケズリ状痕跡では、ハケメと向きを違えるものはなく、むしろハケメの一単位の中の条と一致するものも多い。さらに、内面では、この辺りからハケメの方向が変わることに加え、胴下半部のハケメの上端に上方からの粘土が覆い被さっている部分も確認できる（同5：矢印）。以上のことから、土器の上半と下半とを分割成形しておいて、両者を併せて一つの壺形にするときに、器壁

遺物の特徴

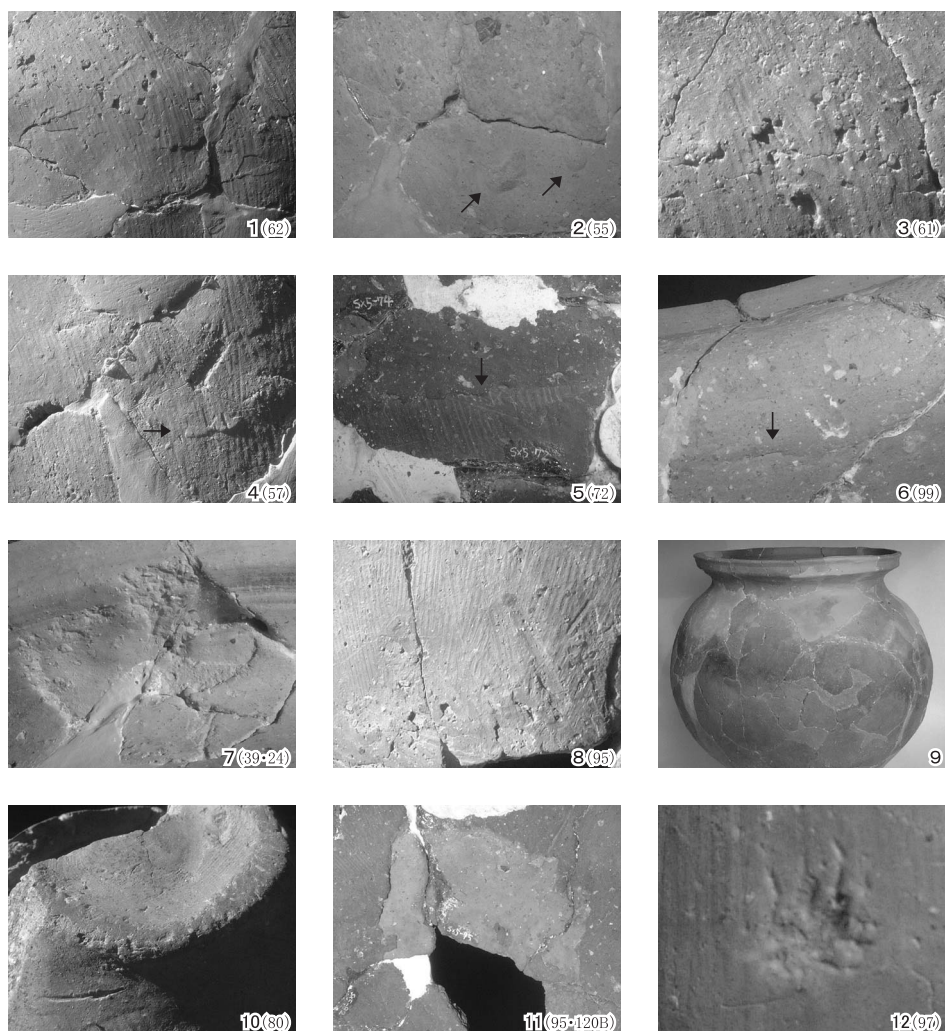


図167 各部の詳細（カッコ内の数字は破片番号） 縮尺不同

の薄い下半と厚い上半とをうまくなじませるべく、接合部外面に補強用に、胴下半とは別の、粗粒砂を多めに含んだ粘土をかなり水分を多く含んだ状態の時に補充し、ハケメを施す原体を下から上へと移動させて上半と下半との密着をはかったと思われる⁽¹¹⁾。

色調差と段差を伴うような同様の接合痕跡は、頸部でも確認でき、例えば99番の内面では、にぶい黄橙色（10YR6/3）の口縁の粘土がにぶい赤褐色（5YR5/4）の頸部の粘土に覆い被さっている（図167-6：矢印）。ただし、この色調の差異は、上記の胴部最大径部とは異なって土器の内側のしかも屈曲部の事例なので、土器焼成時の被熱の程度差を示すに

すぎない可能性もある。この他の頸部での接合痕跡では、39・24番の外面の剝離部では、横位のナデが確認できることに加え、剝離によって生じた段差であるにもかかわらず、色調は途切れずに整合的に移行していく（同7）。この場合は、接合強化のための添付粘土が、焼成直前ないしは焼成中に剝がれた痕跡と考えられよう。また、胴下半と底部付近においても、粘土の色調の差異はないけれども、胴下半外面の粘土が底部付近外面の粘土に覆い被さるようになって段差を生んでいる部分があり、例えば95番では、その段差上位側に2mmの砂粒が下から上へわずかに移動しているケズリ状痕跡があつて、しかも下位のハケメとは異なる方向をとっている（同8）。つまり、この部位においても器体上方の調整が下方の調整の上に行っている。

こうした観察によれば、この土器は口縁・胴上半・胴下半・底部付近・底部円盤の複数の部位に分けてあらかじめ成形しておいて、それらを輪積みのように密着させるときに、それぞれ口縁側の部位が底部側の部位に覆い被さるように粘土を付加していると判断される。このように、製作技法において、器壁の厚みという点では水平方向でのまとまりはあるが、そのまとまりを越えて垂直方向にまとまりをみせる製作の単位があるわけではないので、製作の単位は、バナナの皮むきのような縦板ではなく、通常の水平方向の粘土単位の積み上げであることは間違いない⁽¹²⁾。

さて、土器の胎土は、内面では部位による偏りなく全体的に、3mmまでの長石・石英および堆積岩粒と思われる濃紺色の砂粒を面積比5～10%程度含む。しかし、外面では、胴下半部にはこうした砂粒はほとんど全くなり、粒子は1mmまでで面積比も1%程度である。また、胴部最大径以上の胴上半や底裏でも比較的粒度は小さく、1mm以上の砂粒の面積比も小さい。対照的に、口縁から頸部、胴部最大径付近の分割成形接着部の段差直上、底部付近には、それぞれ2mm以上の砂粒が3%以上の面積比で確認できる部分が多い。特に胴部の分割整形接合部では、その面積比が上述のように外面では著しく高く、内面と同程度であり、胴部に砂粒の帯が巡っている観を呈するとも言えよう。この外面の含有砂粒の対照は、成形技術からうかがえた分割成形の単位とおよそ対応するが、内面ではそうした対照性はないので、胎土全体の違いというよりは、外面の器面調整作業中の工程の違いと解釈できよう。以上のように、この土器は、基本的には同一の胎土を複数の部位に分けて分割整形で製作されたが、外面を比較的丁寧に調整しながら、それぞれの部位を念入りに継ぎ合わせたと考えられる。

(2) 使用に関して

胴部外面の最大径部分よりやや上方の斜めハケメ部に幅5cm前後の帯状の薄黒色部分が巡っている(図167-9)。使用に伴う煤の付着なのか、土器焼成時のものなのかは不明である。その一方で、口縁外面の受け口部から胴部にかけて薄黒色部分が下方に連なる箇所があり、吹きこぼれを思わせる(54・39番)。使用痕として明確なものに、被熱ではないが、畳付の摩滅光沢をあげられる(同10)。この土器が頻繁に据え置かれたりするなどして、底部に対していくらかの営力が頻繁にかかった証拠となろう。このほかに使用痕と思われるものとして、器面の剝離部が数カ所認められる。破損時ないし堆積時のもので使用時点には存在しなかった場合もあろうが、複数の破片にまたがって剝離の縁端を共有しているものについては、破損以前の剝離とみなし得る。底部付近の95番と120B番の内面にまたがる剝離部は(同11)、底部と胴下半部との接着粘土が剝離したものであろうが、通常の内面とは色調の差異が明瞭なので、焼成以後に生じたと思われる。胎土中に気泡などを含んでいて割がれやすかった部分が、オタマなどと接触して剝離した使用痕といえるかもしれない⁽¹³⁾。複数の破片にまたがるこうした剝離部は外面にもあり、39番と41番にまたがる口縁の外縁に認められる。ここは、他の器物と接触して一部損壊してしまったのだろう。一部損壊という観点で見れば、59・97番の外面の5mmほどの傷には、小指の爪先のような鋭利な傷も数条見られ(同12)、齧歯類の噛み痕の可能性もある⁽¹⁴⁾。

器表面の摩滅度を見てみると(図168)、外面の摩滅度の高い破片は胴部最大径付近ないしその直下にやや目立つが、剝離はむしろ器表面が摩滅していないものにも多い。それぞれ、土器を支持する際の手ズレと、他の器物との接触による使用痕と考えられるかもしれない。その一方で内面については、破片の多くは出土時に内面上向きだったので破損後の表面変化の可能性もあるが、摩滅度の高い破片が総じて多く、また、内面の剝離があるものは内面の摩滅しているものの中でも胴下半にやや目立つ。内容物やその内容物を取り出す行為によって器表面が摩り減っていた可能性もある。なお、内面上向き出土以外で内面の摩滅度が高い破片は、頸部付近に目立つので、土器を横向けに抱えながら内容物をかき出す作業もしばしばおこなわれたのかもしれない。

(3) 破損に関して

破片の形状では(図166)、頸部から胴上半では横長の菱形・三角形が目立ち、胴中央付近では(隅丸)方形が目立つ⁽¹⁵⁾。破片の大きさは、最小で15mm四方程度、最大でも80mm四方程度であり、長軸の長さで見れば20~120mmに収まる。部位ごとに見れば、口縁部は124

番と包含層出土破片を除いて全て長軸50mm以上であり、また底部・底部付近でも82番を除いていずれも長軸50mm以上であり、どちらの部位でも一破片当たりの表面積が小さくならない傾向が強い。同様の特徴は、胴中央部の分割成形接合部付近でもみられ、包含層出土のものを除けば79番を除いて長軸が50mmを超えるもので占められており、そのうち70mmを超える大型のものも半数近くある。対照的に胴下半部では、97番を除いて長軸が70mmを超えるものはなく、1破片当たりの表面積がやや小さくなり小破片化している傾向がある。なお胴上半は、小片もあるけれども比較的大きめの破片が多い。破片の大きさは割れやすさの目安となるが、当然、器壁の厚みに規制されるので、厚い破片は小さくなくなり薄く薄い破片は小さくなりやすい。この点で胴下半部の小破片化は必然的である。

完形個体の破損という現象を考えてみた場合、土器の第一次的な亀裂を把握することは重要である。こうした亀裂をここでは「破損幹線」と呼ぶ。破損幹線は幹線以外の破損線に切られることはな

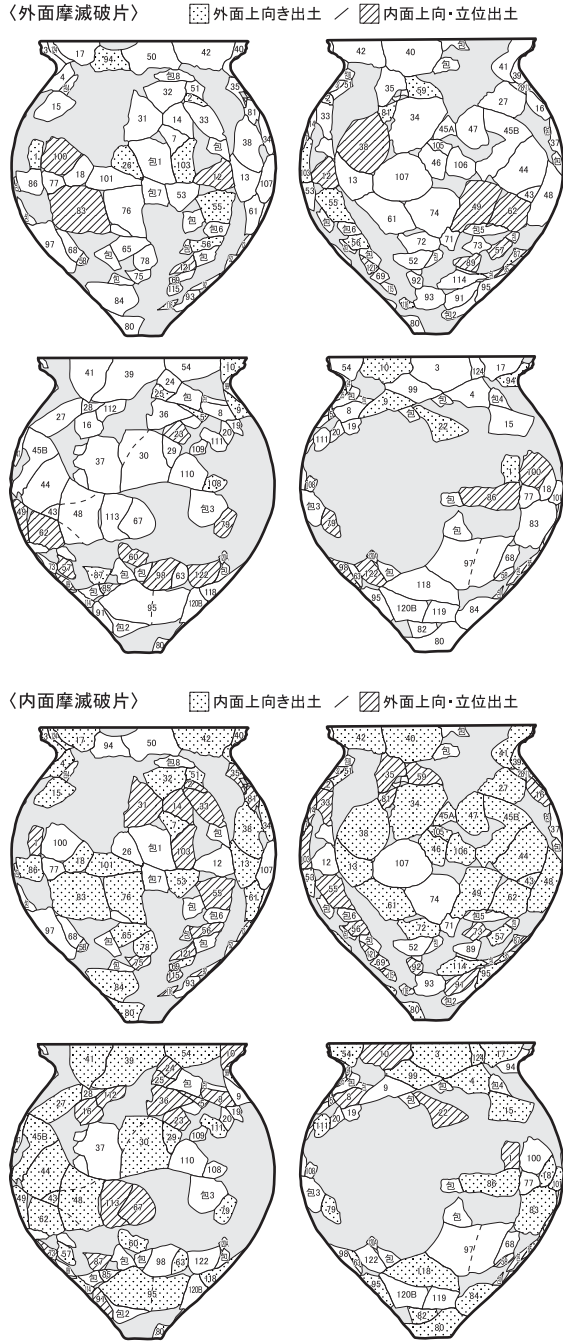


図168 内外面の摩滅の傾向 縮尺約1/10

く、幹線以外の破損線は理論上は時間的に幹線よりも後に生じたことになる⁽¹⁶⁾。破損幹線の走向は(図166)、胴上半は斜方向が目立ち、胴下半では底部付近から放射状に走るもの、すなわち、口縁に対しておよそ垂直方向にスムーズに走るものが目立つ。口縁に対して水平方向に走る破損線は、胴中央部の分割成形接合部およびその数cm上位の最大径付近によく認められるほかは、頸部くびれ部付近に多少認められるだけであるが、そのどちらの部位でも、破損線が波打つように走行している。頸部にまで垂直方向の幹線が達してはいないが、胴部最大径付近の分割成形接合部は、垂直方向の幹線を切ることはほとんどない。おそらく、頸部でも胴中央部でも、分割整形という技法のために継ぎ目から破損しやすかったとはいえ、製作時の粘土塗布による入念な密着化によって、このような波行を示したのだろう。

外面ないし内面のどこか一点を中心にしてそこに穴が生じ、かつそこから皮むきされたバナナのように全ての破損幹線が放射状に走り始める、といった箇所は明確には確認できない⁽¹⁷⁾。しかし、胴下半部では、底部付近の84番と116番の間あたりに、部分的にバナナの皮むきのような幹線の収斂がみられる(図166:×印)。これに対して、胴部ではむしろ斜め方向に破損幹線の走行がみられるが、明確な収斂箇所は見あたらない。この土器は、バナナの皮むきのように縦方向の粘土板をつなぎ合わせる技術では製作されていないので、少なくとも垂直方向の破損幹線のほとんどは土器焼成以後に生じた要因によって走ったことを示している。例えば、土器の疲労部分(ひびなど)を示しているか、あるいは破損を生じさせた衝撃の伝わり方を示しているかもしれない。複数の破損線の合流点において、破片縁辺部に見られる剥離痕のような傷跡が、その合流点を中心にそれぞれの破片に共有されていれば、その傷が破損に先行して生じている可能性があり、そうした箇所は、61番と74番と107番との縁辺が同時に交わる箇所と、16番と28番と112番との縁辺が同時に交わる箇所がある。しかし、どちらの交点も、破損幹線の放射状走向の起点とはなっていないので、破損前の疲労を示唆するもののその傷が破損の直接の要因とは考えがたい。

垂直方向の破損幹線の走向と関わる疲労として注意したいのは、畳付けの摩滅が物語る、土器を正位に据える行為の頻度の高さである。この行為による衝撃疲労が、底部から口縁方向へ向かうかたちで蓄積されていたと考えられる。また、復原的に製作した縄文土器の煮沸体験を重ねた研究によれば、破損幹線が垂直方向に生じやすく水平方向に生じにくいという⁽¹⁸⁾。縄文土器も弥生土器も煮沸土器においては製作と使用に著しい違いがないとすれば、先史土器においては、煮沸の繰り返しによって、製作技法に伴う水平方向の相対

的脆さ以上に垂直方向に潜在的疲労が蓄積していると理解できるかもしれない。SX5の壺形土器には胴上半に帯状の黒色部が巡るが、これを煮沸による二次的被熱痕跡とみなすならば、頻繁な据置行為に加えて煮沸も、垂直方向への疲労を蓄積させたと考えられる。

いずれにしても、破損幹線の多くは、破損を生じさせた衝撃の伝わり方を示していると考えべきであり、以上より、底部近くの84番と116番のあいだ辺りの衝撃が破損の直接要因だと考えられる。そして、そこは「地球の裏側」に相当するような対称的位置関係の辺りで破損線を見てみると、108番より外面向かって右側辺りを中心にして、水を張ったバケツを叩いたときの水紋のように、同心円状の走向が読み取れるので、その同心円の中心を、84番と116番のあいだを基点とする破損の衝撃の伝導の最終到達点と考えれば、この推測は矛盾してはいないだろう。

5 出土の状況

本章と次章では、破損した壺形土器の出土状況について、まず本章で各破片の特徴と原位置情報とを組み合わせてながら検討し、つづいて次章で破片の接合作業から得られた知見を説明する。

K S00 SX5の分布の平面形状は(図169)、前述のように東西長軸をもつ略楕円形である。破片の出土標高をみてみると、東西では、ほぼ水平と言えるがごくわずかに西が低く、南北では、X=1998.7付近までは北から南へとおよそ50cmにつき20cmの勾配で低くなっておりそれ以南では標高59.95mくらいそのまま勾配もなくなる。つまりSX5は、およそ地形を反映した垂直分布を呈する。破片の出土標高を参考にして、後述するように二次的に移動したと思われる破片の存在なども考慮しつつ、試みに等高線を5cmコンターで引いてみると(図170)、遺物の広がりや東半西側付近がやや北東方向へ入り江状に奥まっているように思われる。これらのことはSX5全体が、掘り込まれた遺構ではないことと、局所的に遺物が溜まりやすい窪地のような堆積環境でもないことを支持する。

破片の大きさを見ると(図171)、長軸70mm以上の大型破片は分布の東半に多く、また東半では長軸40mm未満の小型破片が西半よりも少ない。西半には大型破片も分布するが小型破片の比率も高い。また、分布の南縁の破片は(82・81・24・25・23・21・20・19・2番)、長軸が40mm未満で、南下がりの地形にもかかわらず出土標高もやや高い。さて、小破片については、西側に多く分布するのは器壁の薄い胴下半部が多く分布することを反映しているが、傾斜の低くなる南縁に分布するものについては、大きい破片よりも弱い営力で

出土の状況

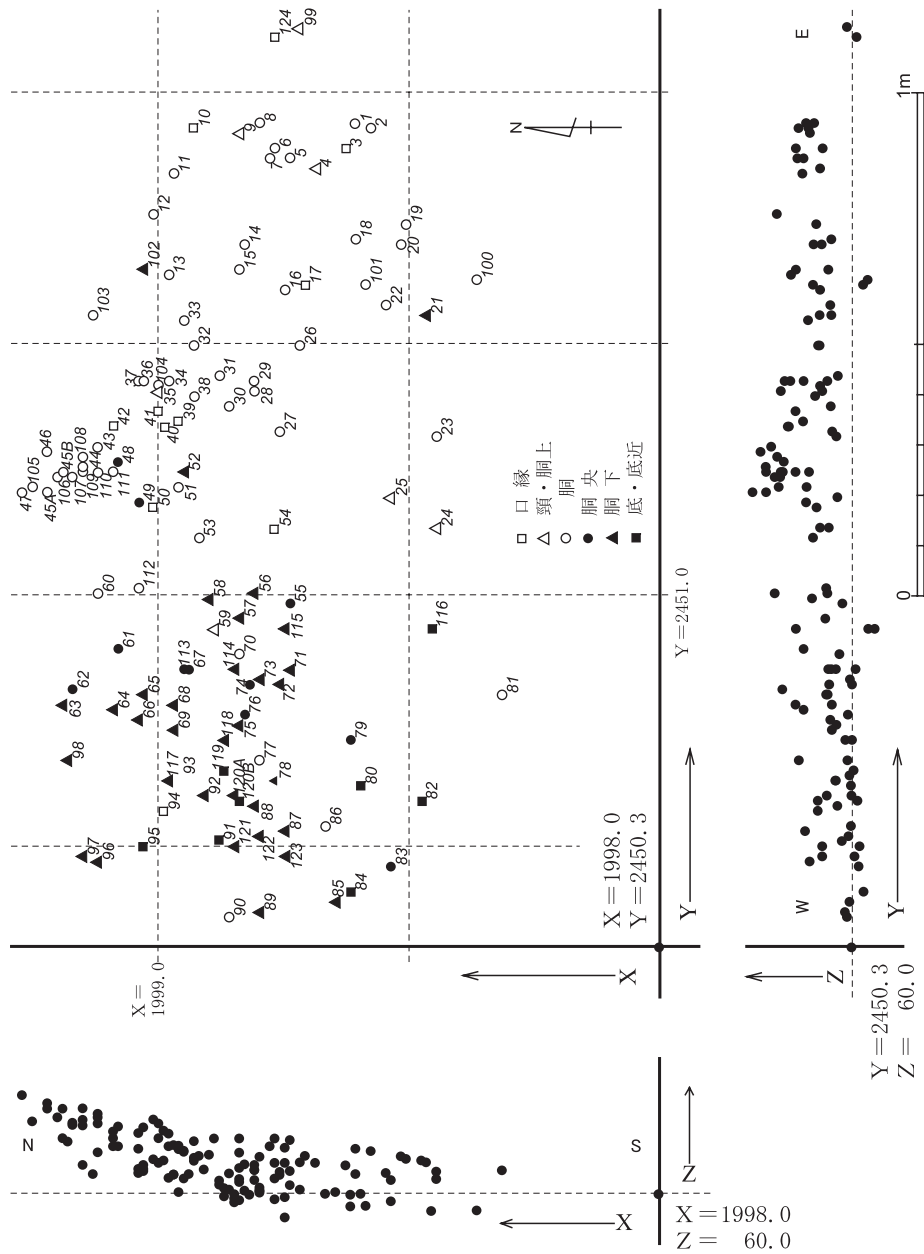


図169 出土土器片の分布 縮尺1/15

遺棄から埋没まで

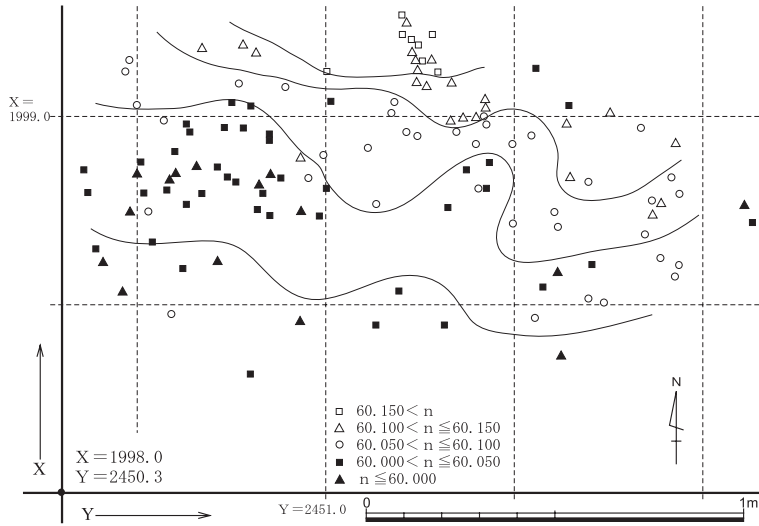


図170 出土破片の標高から推定したS X 5 一带の等高線 縮尺1/20

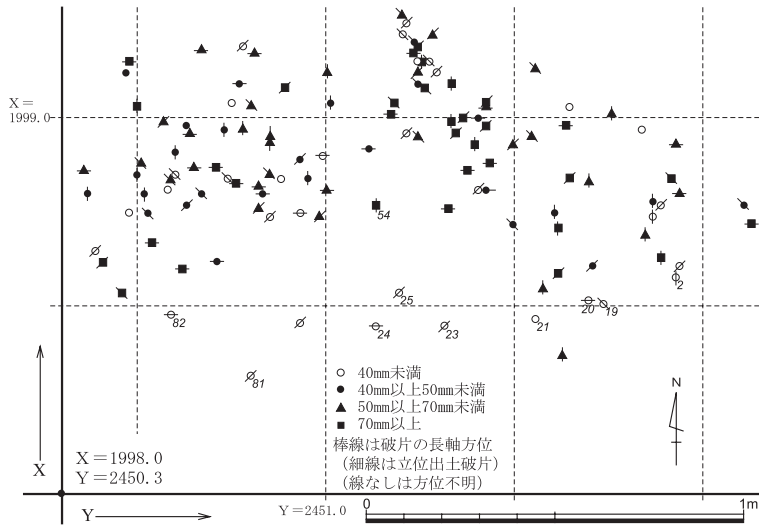


図171 出土破片の大きさと長軸方位 縮尺1/20

出土の状況

移動しやすいという必然的条件のみでなく、出土標高が比較的高いという特徴も、ともに二次的移動を示唆するだろう。

破片の長軸方位を長軸70mm以上の大型破片で見ると、中央北側では、傾斜に直行する東西方向のものはほとんどなく、南下がりの地形を反映した長軸方位である。中央から西半にかけては、傾斜の緩くなる南半では南北方向をとらずに傾斜に直交するものが多い。これに対して中央部の54番や東半東側の破片では、傾斜の緩くなる南半でもほとんど傾斜に平行して南北方向をとる。さて、中央部の54番あたりと東半東側は、推定等高線が示すように半島状の高まりとなっており、そこでは、SX5南半のそれ以外の箇所が川岸に打ち寄せる弱い水流を完全に被って微かに地点移動するような水深になっても、まだ半島の上では水がひたひた寄せる程度で、却って引き波の影響をやや強めに受けて、川の方へ向かう長軸方向となる南北方向へと水平回転している可能性もある。その他では、勾配のほとんどない南半では、東辺を除いて、東西方向の水の弱い流れの影響を受けていたかもしれない。つまり、破片が着地してからは、西への弱い水流に引きずられるようなわずかな移動もあったのかもしれない。

土器の部位別の分布をみると（図169）、胴下半から底部にかけてはほとんど西半に分布し、対照的に胴部から口縁部にかけてはほとんど東半に分布するかたちで、西から東に進むにつれて底部から口縁部へと移っていくように、部位ごとのまとまりにはかなり整合性がある。胴下半で東半に分布しているものでは、その中でも最も西寄りに出土した52番を除く21・102番の2点は、接合が適わずしかも長軸30mm以下の小片であり、特に21番は標高もやや高い。また、胴部で西半に分布しているものでは、55・61・62・67・113・74・76・77・79・83番は、胴中央部の分割成形接合部の器壁の厚い部分が含まれる破片である。この部位の破片は、後述のように、61・62番を除いて、中央北辺から南西へ直線的に分布する。西半の59・94番は、周囲の破片に比べ出土標高が高い。底部や底部付近の破片は、土器に占める表面積率が少ないので破片数も少ないが、西半でも特に西側の南半に分布する。これらのことより、21・59・94・102番は、やや長距離を二次的に移動した可能性がある。

破片が出土したときにその破片の口縁方向が指している方位を破片の口縁方位とする。口縁方位を見てみると（図172）、全体の3分の1以上が西を基調としていて、東基調は全体の4分の1にも満たない。部位別分布からは東基調が高率をとることが期待されたけれども、実際はむしろその逆である。従って破片そのものは、着地点を空間的にはほとんど

遺棄から埋没まで

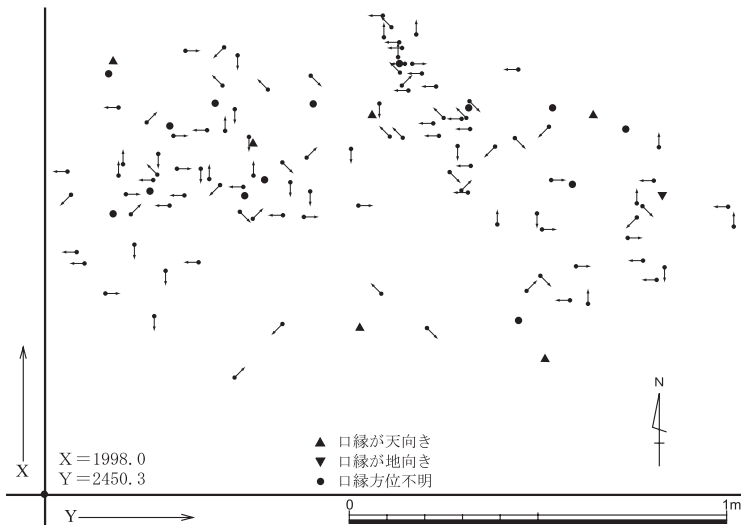


図172 出土破片の口縁方位 縮尺1/20

ど動いていないと仮定しても、潰れて割れたままの状態を維持しているのではなく、着地後に二次的に、大した水平・垂直移動には至らないような小さな営力を受けて、独楽のように回転した可能性もある。例えば、接地している土器とシルトとの隙間に、打ち寄せる小波や降雨にともなう水が入り込んで回転させた状況も想定できるかもしれない。

破片の出土時の内外面の向きでは(図173)、内面を上に向けて出土したものが最も多く、外面を上にして出土した破片の倍以上あり、全体でも半数を超えるが、そのうち30点は、上を向いていた内面があまり摩耗していない。外面を上に向けているものと立位のものはほぼ同数で、それぞれ全体の4分の1以下である。立位で出土している破片は、西北辺と東北辺および南縁東半にややまとまって出土しており、そのうち南縁東半では、破片も大きく出土標高も低い100番以外の、21・23・24番の3点は破片も小さく出土標高も高い。立位出土でも外面を北方へ向けているものは、南下がりの地形を加味すれば、やや角度のきつい内面上向きとみなすこともできよう。すると、外面上向きと捉えられる外面南向きの立位出土のものは、わずかに3点しかない。また、外面が東西どちらかを向いている立位出土破片は10点あるが、南縁のもの以外は、91番や121番あるいは33番や37番などの、小さくはない破片が、南下がり斜面で傾斜に沿った立ち位置になっている。外面上向き出土は、分布の東縁と、中央やや西寄りに目立つものの、分布の偏りというほどではない。外面上向き出土では、外面が摩滅しているものは半数以上あり、それらの中では分布の東

出土の状況

縁と南縁に多い。部位別で特徴があるのは、口縁部破片で、10・50・94番以外は全て内面が上向きで出土しているが、そのうち94番は、上述のように他の口縁部の出土傾向に反して離れて西側で出土し標高も高い。

内面上向きの破片が多いので、もともと完形だった土器が単純に押しつぶされてそのままの状態をある程度保っていたとは考えにくい。部位別分布では長距離の錯綜した移動が否定されるから、内面が上に向きやすいような地形環境だったか、もともと内面を上向きにするように破損したかであろう。前者の場合は、破片の湾曲の内側が内面に相当することから、斜面上から転落してきて内面を上に向けた安定状態で静止したという想定になるが、それほど斜面を転落しながら移動したにしては、破片の分布の広がりに対して部位別分布が整合的すぎるかもしれない。後者の場合は、完形土器が破損したときの、着地した地面側の破片だけでなく、天空側の破片も上向きになるような状況、すなわち、破損時に土器内部から外部へかけての営力がある程度生じ、かつ着地床のシルト質土がある程度の弾力性をもつ湿った状態で着地の反動を吸収した可能性が高い。それでも、破片の広がり部位別分布に照らして、落下の際の位置エネルギーはあまり大きくなく、せいぜい数十mmの高さからの自然落下であろう。

立位出土破片では、上述の中央南縁の21・23・24番の3点は、二次的に移動した結果によると思われる。立位の破片のやや集中した分布が、斜面やや上方に相当する西北部に位置するが、そこでは破片も長軸40mm以上と小さくなく、しかも内面ないし外面が東西方向を向いて破片自体は斜面方向に平行なものを含むということは、それぞれの破片が立位で安定しやすいような溝が傾斜にそっておよそ平行して存在していた可能性もある。その成因として、降雨の流水による、わずかなガリー状の浸食を想定したい。

破片の表面の遺存状態では、外面良好で内面摩滅しているものが半数以上ある(図174)。内外面良好のものは20点、内面良好で外面摩滅のものが10点、内外面摩滅のものが28点ある。内面摩滅しているものは分布に偏りなく存在し、内面上向きで出土するものが多い。一方、内面良好のものは30点あり、偏りなく分布し22点が立位ないしは外面上向き出土だが、そのうち6点ある内面上向き出土では、東半には1点しかなく、西半には5点ある。また、外面摩滅している38点では、分布の東半と南縁ではほとんどが外面上向きで出土しているが、西半ではむしろ立位ないしは内面上向きが多い。以上から、強いて言えば東半では、上向きで出土する破片の上を向いた面に摩滅を生み易い傾向がややうかがえるが、排他的傾向ではなく、二次的な摩滅が特定の地点でより進行したとは想定できない。

遺棄から埋没まで

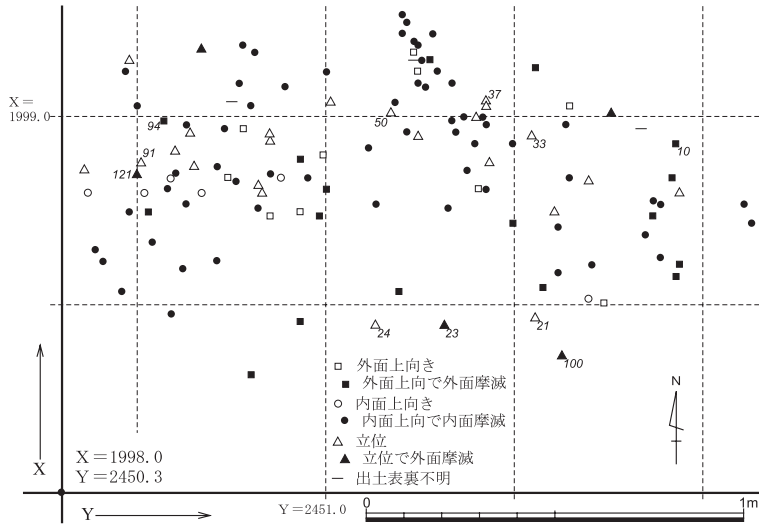


図173 出土破片の出土時の向き 縮尺1/20

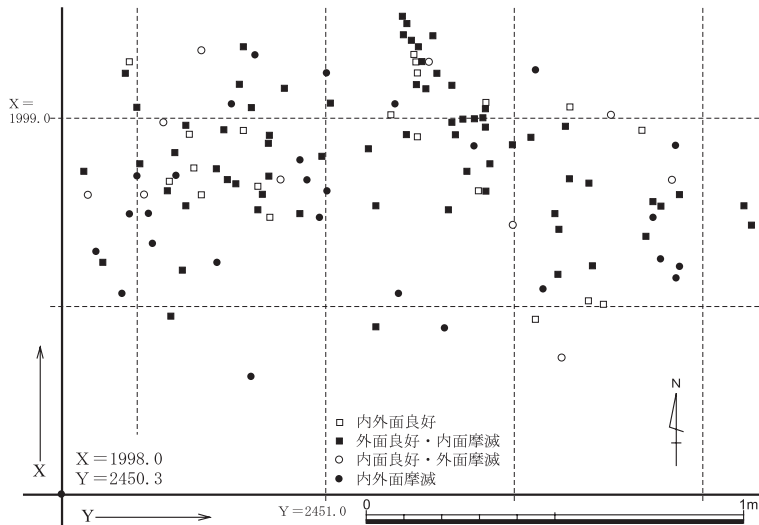


図174 出土破片の内外面の摩滅程度 縮尺 1/20

6 接合関係の読みと接合線の読み

(1) 接合関係の読み (図175・176)

一つの破片において、34番のように、50cm近く離れて接合してもその接着断面がびったり密着する縁端辺をもつ一方で(59番との接合)、すぐ近くで出土して接合する破片との接着がよくない縁端辺をもつ例はある(38番との接合)。しかし、概して長い距離を離れて接合する破片どうしは、少なくともどちらか一方の破片の破断面の摩滅が進んでいて接着面積が小さくなって接着がよくないことが多く、接着面積が小さくないにもかかわらず接着がよくない場合も、ほとんどの接合例はやや離れた破片どうしである(図175・176)。このことは、器表面以上に破断面が摩滅しやすいことを示している。

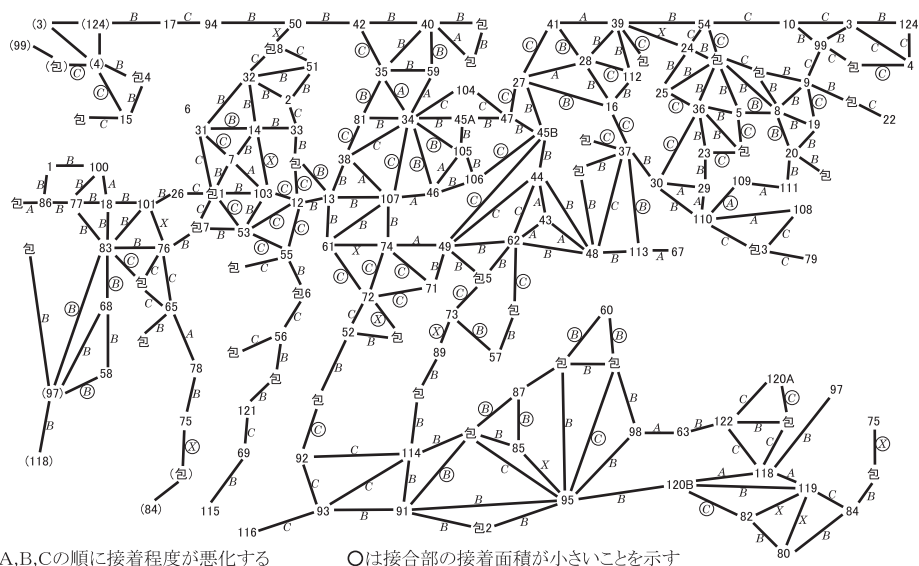
接合関係にある破片の接合部の密着程度は、破損幹線とも土器片の出土位置とも相関しない。また、各破片を構成する縁端辺それぞれの破断面の摩滅程度も、土器片の出土位置とは、東辺の数点を除いておよそ相関しない。ただし、縁端辺の破断面の摩滅程度は破損幹線と相関し、破損幹線上に位置する縁端辺は摩滅の進んでいることが多い。このことは、もともと土器にひびが入っていた場合に、破損後に摩滅しやすくなることを示しているかもしれない。なお、東辺で出土した1・2・3番については、それぞれの破片のうちでも東側に位置していた縁端辺の破断面の摩滅程度が他の縁端辺に比べて高い。東からの、例えば水などの影響を、SX5の中で最も受けやすかったのだろうか。

(2) 接合線の読み (図177~181)

比較的長距離の接合をする破片のうちで、西から、85・82・81・116・24・25・23・20・19・5・2番は、それぞれ、接合する他の破片よりも小さくかつ傾斜の下側に位置する(図177)。そのうちでも85・116番以外の9点は出土標高が高いので、それら9点は二次的に移動してきた可能性が高い。

口縁部の分散度に対して底部の分散度が低いのは、破片の数に反映される器表面の少なさもあろう。しかしそれでも、二次的移動を考慮してもなお、底部と底部付近の破片の接合線は、東西方向よりも南北方向の方が長くまた多いように、斜面に沿った散逸状況を呈すのに対し、口縁部破片の接合線は東西方向に長く、全体として西北西から東南東の軸をもつ(図178)。つまり、器体の上部と下部とでは割れた破片の分布の仕方が異なる。さらに、胴中央部の分割成形接合部の接合線は、全体として東北東から西南西の軸をもつ(同図)。このように、部位ごとで接合線の方向が平行しない関係にあることは、完形土器が単純に

遺棄から埋没まで



A,B,Cの順に接着程度が悪化する ○は接合部の接着面積が小さいことを示す

図175 出土破片の接合関係と接合破片間の接着程度

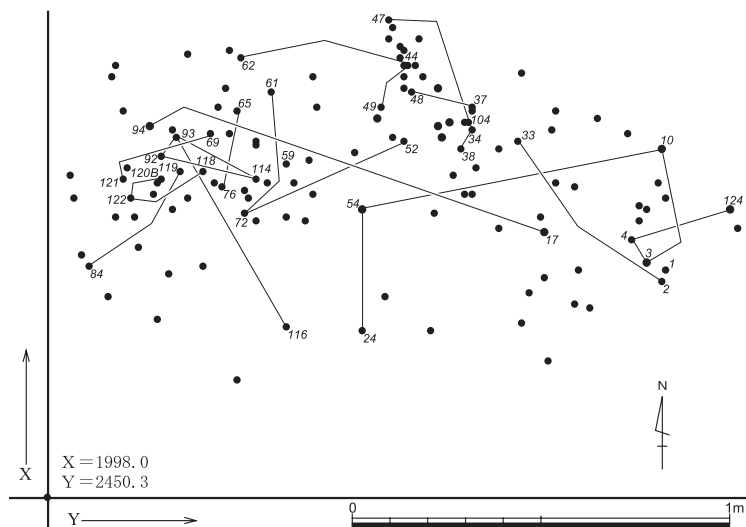


図176 密着程度は低い接着面積の小さい破片どうしの接合線 縮尺1/20

接合関係の読みと接合線の読み

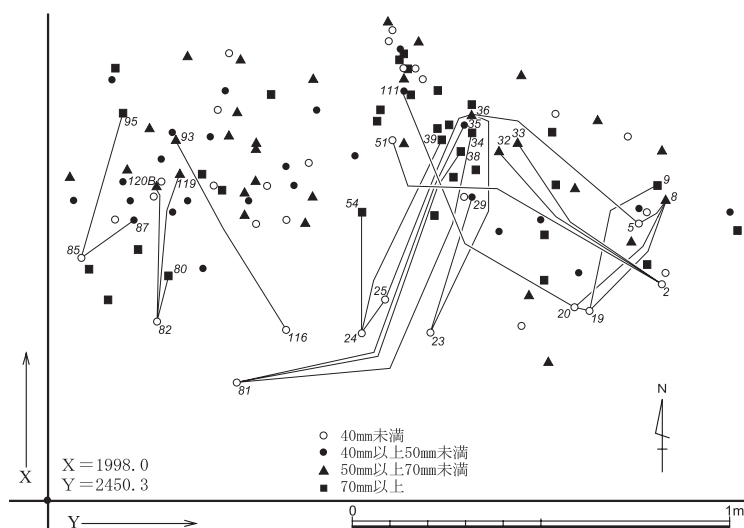


図177 南縁側に分布する小破片の接合線 縮尺1/20

その場で押し潰されたわけではないことを示す。また、胴下半では、垂直方向の破損幹線に挟まれたバナナの皮状の縦長のまとまり部分の破片における接合線は、玉突き的な連結状態を示さずに返し縫いになることが多い（図179）。縦長の長軸の両極から営力が加わった結果、その中央付近が横へはじけ出すように割れたのかもしれない。

破損線に囲まれた破片のまとまり（＝破片群）にあつては（図180）、7つの破片群において、構成破片の分布と構成破片間の接合線の収斂とに、ある程度の有意性を示している（図181）。A群では、中央付近に出土した口縁部の50番と胴部の51番を基点として、東ないし東南東に向かって分散的に、より底部に近い破片が遠くなるかたちで分布する。つまり、口縁部よりも胴部の方が強い営力を受けて、そして全体的にみてやや大きい営力を受けながら飛散したといえる。B群では、A群よりも分布域がまとまっており、傾斜の上方にある口縁部の42番を基点とみれば、底部に近い破片が遠くなるかたちで、その東ないし東南で出土している。つまり、口縁部よりも胴部の方が強い営力を受けて、全体的にはあまり営力を受けずに内面上向きに分布していったといえる。C群も、B群と同様に分布域がまとまっており、傾斜の上方にある47番を基点とすれば、底部により近い破片がより南で出土している。つまり、胴中央付近が胴上半より幾分強い営力を受けつつも、全体的にはほとんど営力を受けずに内面上向きに分布していったといえる。D群は、A群のように

遺棄から埋没まで

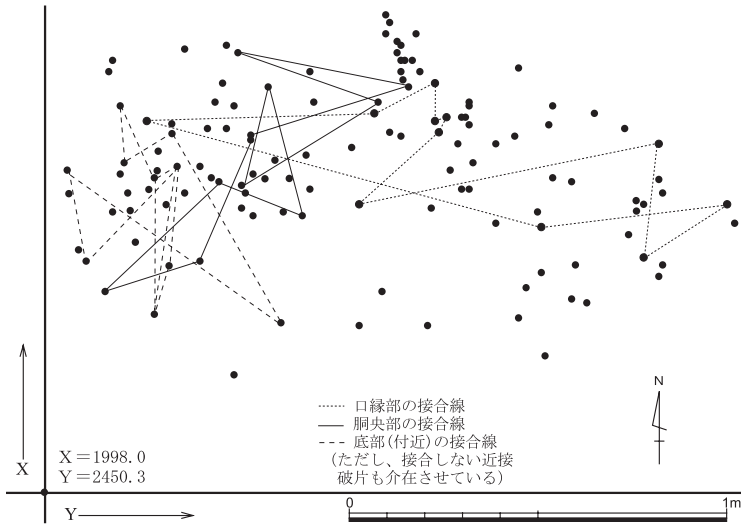


図178 口縁・胴央部・底部付近の破片の接合線 縮尺1/20

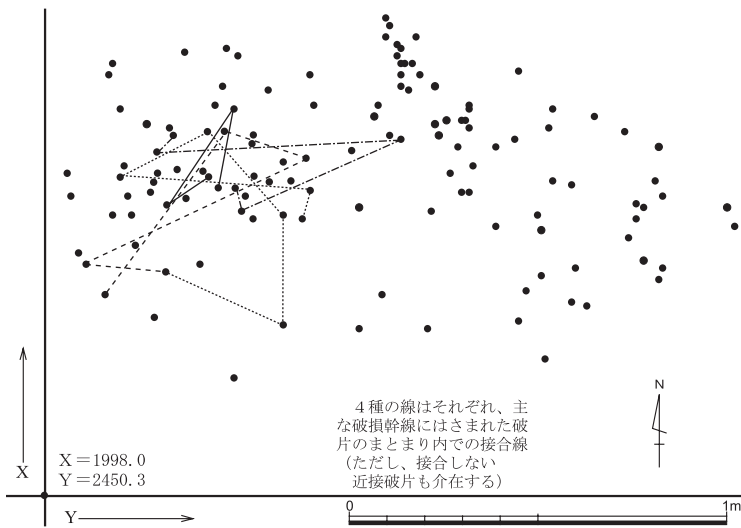


図179 垂直方向の破損線にはさまれた胴下半部の破片の接合線 縮尺1/20

接合関係の読みと接合線の読み

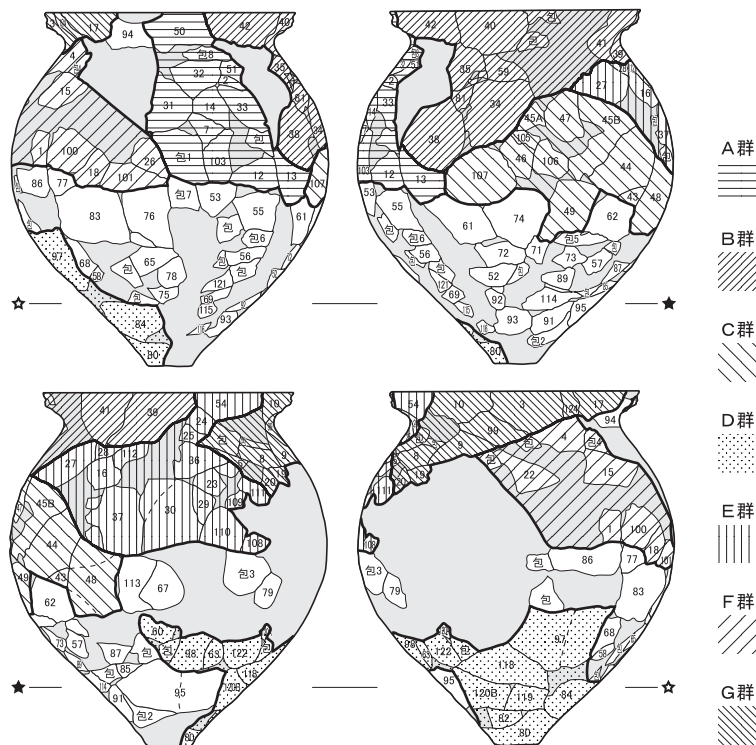


図180 破損線に囲まれた主な破片群の位置

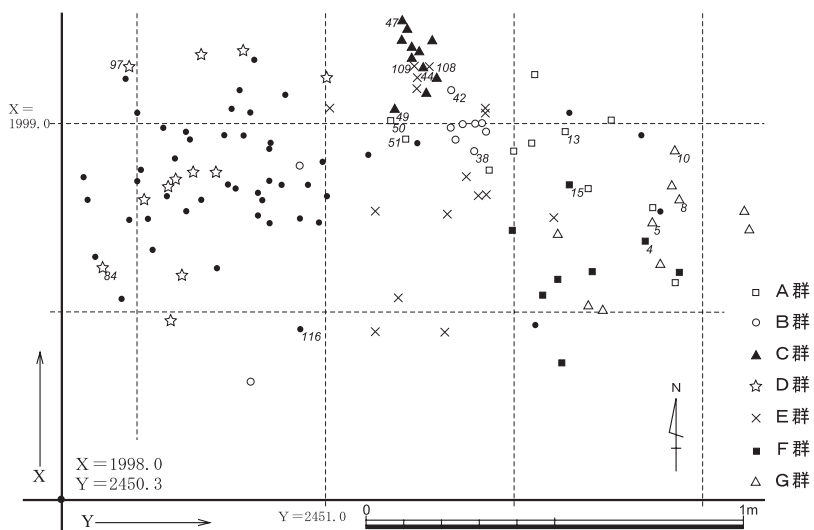


図181 各主要破片群を構成する破片の分布 縮尺1/20

分布域が広いものの、斜面の上方にある97番を基点に見れば、底部により近い破片がより南ないし東に分布している。つまり、胴下半部よりも底部の方が強い営力を受けて全体的に大きい営力を受けながら飛散したといえる。

これらに対し、E群では斜面上方の108・109番を基点に見れば、東南東から南に向かって分散的に、土器の外面向かって左側の破片が遠くなるかたちで分布する。つまり、口縁部よりも胴部が、さらに胴部でも外面向かって右側に相当する欠損部側よりは向かって左側のB・C群に近い方が、強い営力を受けて分布していったといえる。F群では、斜面上方にある15番を基点に見れば、より底部に近い破片が遠くなるかたちで東南から南に向かってし、G群では、斜面上方の口縁部の10番を基点に見れば、土器の外面向かって右側の破片あるいは底部に近い破片が遠くなるかたちで東南から南南西に向かって、それぞれ分散的に分布していった。F群もG群も、ともにその基点となる破片がその他の群よりもかなり東に位置していることに照らしても、全体的に他の5群よりも大きい営力を受けながら飛散していると思われるが、F群は胴中央付近が胴上半よりも強い営力を、G群は、口縁部よりも胴部、そして口縁部では外面向かって左側の欠損部側よりも向かって右側のA群に近い方が強い営力を、それぞれ受けて飛散したといえる⁽¹⁹⁾。

以上の7群に含まれない胴下半部の破片は、まとまりを抽出することは難しく、どこを基点にどの方向に分散したかは判断しがたい。しかしながら、7つの群の形成をこのように推測できるならば、落下の位置エネルギーは、そのまま単純に重力方向に吸収されたのではなく、ある程度強い反作用・反動を受けて、これらの群の破片を東方や南方へ推進させたと考えられる。

その位置エネルギーの反動が各群どうしの関係にどう作用したのか整理すると、それぞれ内面上向きの出土が多いA・Bの二群が、衝撃による営力によって運ばれるときに、13・38番が口縁方向への引っ張られるように飛ばされて、13番はA群で最も東方へ、38番はB群で最も南東へそれぞれ着地したのだろう。内面上向きの多いC群は、49番が南方へ引っ張られるようにして内面上向きで着地したのだろう。G群は5・8番が口縁方向に強く引っ張られるように東南東へ、F群はやや不明だが4番が口縁方向に引っ張られるかたちで東南東へ、それぞれ巴投げで飛ばされたように着地したのかもしれない。

E群については、この土器が最初に着地した部分とは対称的位置関係にありながらも、108・109番が、C群の44番よりもほぼ同地点の下位から出土している。E群では立位や外面上向きの出土破片も多いことも加味すれば、落下の位置エネルギーを最もそのまま重力

破損状況の復原

方向に反映させて、外面上向きのままやや水平回転をしながらほとんど真下へ着地したのではないだろうか。

また、回収され得なかった破片の多い部分（＝欠損部）については、最初に着地したと想定できる底部付近の84番と116番のあいだ辺りとは対称的位置関係となる部分の、やや南側に相当する。つまり、衝撃で飛んだその部分が、他の破片より遠く南方で着地した可能性が高い。これは、前述のように、その部位を中心に破損線が同心円状に走ることから支持されよう。南方は、白川の流れをはるかに受けやすい所であり、従って、はるか下流に運ばれていって、この調査地点よりも遠くへもたらされたのではないだろうか。

7 破損状況の復原

K S00 S X 5についてこれまで検討してきた、状況証拠（遺跡の堆積環境、破片の原位置・接合に伴う特徴）と、物的証拠（遺物の内包する特徴）を基に、ここでは破損直前から完全に埋没するまでの状況や背景を解釈・推測する。

(1) 破損前後の状況と内容物の解釈

S X 5は、北西方面のやや斜面上方で、底部が西側で口縁部が東方向を向く状態で破損し、そして埋没したと考えられるが、ここでは、これまでの情報と推測を整理しつつ、破損の前後について時間を微分的に細かくみていきながら、内容物の解釈も試みる。まず落下前に関して。底部破片から口縁部破片にかけておよそ西から東へと連続的に分布していること、個々の破片が小さいこと、散漫な分布を示さずに分布全体の面積が小さいこと、そういった点から、この土器が遺棄された当時のこの地点は、水際とはいえ、数十cmの高さの植物が生い茂るような環境ではなかったことがうかがわれる。多年生の植物が生育するほど水の影響が少ない環境ではなく、また、一年生の植物が繁茂する季節でもなかったと言えるかもしれない。一年に何度かは水に覆われるが遺棄されたときには植物が繁茂していなかったような、「秋から春までの間の水際」という時季と環境が推測される。さらには、シルト質土は、乾燥して固形粘土のように固化している状態ではなく、ある程度の湿気を保っていたと考え得ることと、立位出土の土器片の方位の検討から斜面傾斜に平行する細い雨溝を想定し得ることから、破損の前後に降雨を想定できるかもしれない。

次に、落下中に関して。破損線に囲まれた7破片群の形成の推測から、位置エネルギーを強い反発力に転換させるべく、内容物の存在が想定できる。つまり、内容物が頸部近くないしそれ以上まで入っていたことが考えられる。二次的に大きく移動したと思われる破

片を除いて、数多くの破片が内面を上に向けていることもこれを支持しよう。

ついで、落下し着地した瞬間について。底部付近の接合線は南北方向を基軸にしているのに対し、口縁部の接合線は東西方向を基軸にしており、器体の上部と下部とでは割れた破片の分布の仕方が異なる。さらに、胴下半部と、胴部及びそれ以上の部位とについて、破片の分布域が東西に別れる点、破片の大きさや形状を異にする点、破損幹線の走向を異にする点、胴中部付近の分割成形接合部の大破片はS X 5の中央北辺から西南にかけておよそ東西を二分する直線状に分布している点、などを考慮すると、胴中部付近の分割成形接合部が胴下半部側に残るかたちで、まず胴部を境に上下二つに分離した可能性がある。

さて、最初の着地部位と想定される胴下半部から、破損を生じさせることになる最初の衝撃が伝導した結果、その対称的位置関係にあるE群の向かって右側の部分、すなわち着地状態で斜面下方側の部分が南方へ飛ばされたと考えられることは、衝撃の伝導が破損直前に比較的均等に器壁を伝わったことを支持していた。つまり内容物は、容器内の空隙部を大きくせざるを得ないような、物質一個当たりで器壁に密着しない部分の占める割合の大きいような固形物質ではなかった、と考えられる。例えば、つかえ棒や角張った石などではなかっただろう。液体か、弾力性のある個体、ないしは一つ当たりの体積の非常に小さい個体だったと思われる。

しかし、ここで注目しておきたいのは、着地部位とは対称的位置関係にあるE群の破片である。E群には、着地の瞬間により地面に近かったはずのC群の破片と同一地点で出土しながら、そのC群の破片よりも低い標高で出土する破片がある。また、E群には外面上向き破片が少なくない。落下のときの位置エネルギーが重力方向に最も作用した破片群と前に述べたが、破損の瞬間に内容物が瞬時に外へ飛び出さないと、こうした状況にはなりにくいであろう。内容物が、落下の瞬間に、口縁から飛び出すだけでなくE群の右側から欠損部破片とともに瞬時に外へ飛び出して、しかも、反作用を最も受け易いはずの、着地部位とは対称的位置関係の破片がそれよりも地面に近かった部位の破片の下位から出土するということから、内容物が個体であったとは考えがたく、従って、内容物は、液体だったことを示すのではないだろうか。

内容物が無機質の着色物質の混濁水であれば、発掘時の周辺土壌、ないしは土器の破片内面に、その痕跡を色調などで確認できていても良いが、それは確認できなかった。また、液体だとすれば、落下・破損後にそれを回収するとは到底考えがたいが、仮に回収しようと試みたとしても、回収行為がその場で積極的に行われたならば、土器破片はもう少し秩序

なく散乱していてもよい。以上から、内容物は、水か水溶液、あるいは有機質の混濁水であったと考えたい。

最後に破損後の経過について。出土時の器表面の向きとその面の磨滅の進行とにある程度の相関があるようで、また、破断面は器表面以上に磨滅が早く生じたと思われるように、破損から埋没までにはある程度の時間があったと言える。特に東半では、天空・東を向いている部分の磨滅がいくぶん早く進行しているようであり、西半よりも埋没までに時間を要していたか、劣化を促進する作用が強く働いていたか、つまり外気ないし水に晒された時間が多少は長かったのだろう。しかし、それらも含めてほとんどの破片において、著しい摩耗をみせない程度の時間を経て、最初の破損時の状態を大きく損なうような攪乱を被らずに、最初の着地時と堆積環境に大きな変化はない状態でシルト中に埋没した。斜面下方に相当する南縁に分布する破片の中には、二次的に移動したと考えられる立位出土の小破片があることから、埋没は当初、いくぶん強めの水流が到来して、そして遅々と水深60.1mくらいまでに達したのであろう。堆積物の粒度と土器の原位置性からみて、下流で堰き止められた白川がダム湖を形成していたことがうかがえる。これほどの川幅と深度のダム湖が形成されるということは、下流を堰き止めた土砂の量も相当なものである⁽²⁰⁾。

(2) 破損理由の推測

地面に据え置かれていた土器が倒れて潰れた可能性は否定され、また、割れた土器の大破片のまとまりを蒔いた後でさらに小破片化したにしては、部位別分布に整合がありすぎるのでその可能性も否定される。水の可能性の高い液体が頸部辺りまで充填されていた完形土器が、地表数十cm程度のところから落ちた衝撃で破損した、と考えるのが妥当であろう。しかし、弥生時代当時の現場は器台を据える足場が確保できるような平坦な状況ではなく、また実際に器台を据えた痕跡を示す遺構もないので、台の上に置かれてはいない。おそらく、成人の腰回りあたりの高さで支持されていた状況から落下して割れたのだろう。

土器は、胴部最大径は30cm以上で器高が40cm近くあるので、最大容量は17リットル前後になる。その中に頸部くらいまで水のような液体を入れたときの総重量は、その液体の密度によるとはいえ、水でも10kgをはるかに超える。そんな状態の土器容器を、着地面から数十cm程度の高さで保持するとなると、おそらく子供には不向きな作業である。底部が小さくて安定の悪い形状を考えると、子供が頭部に載せて移動するにも不安定であり、やはり、大人が腹を利用して両手で抱きかかえている場面を想定するのがもっとも妥当である。では、意図的な投棄か、それとも不慮の落下か。

K S00 S X 5の近くでの同時期の遺物は(図163)、20mほど東の上流に位置する、S X 5と同様の川岸付近ところで、使用痕跡のある三穴の石庖丁一点と、残存率が20%弱の甕一個体(同図S X 6)とが確認されているほかは、この調査地点西北部の高野川系の流路の中などから土器の細片が4点出土しているのみであり、また、北白川追分町遺跡全体でも、ほとんど全く出土を見ない。従って、この地点での遺棄行為は積極的にはおこなわれなかったといえる。ただし、水辺という環境も考慮すれば、祭祀行為の可能性は容易には捨てきれない。20m上流のS X 6についてはともかくとしても、石庖丁については、京大構内遺跡でも初出であるほど希有な遺物であるばかりか、通常より一つ多い三箇所を穿孔していることから、遺物そのものの物的属性だけみても特殊な遺物ともいえる。この遺物の存在をもって、その水際という出土状況に対して、祭祀行為をあてがうような推測をするならば、やや距離があるとはいえ同様の水際という環境にあるS X 5も、祭祀行為に伴うものとみなすことはできる。しかし、それにしても同様の祭祀は繰り返行われた形跡が無いので、「祭祀空間」だったとはいえない。むしろ、破損の前後に降雨を想定できるような気象条件を考えるならば、湿った斜面で足を滑らせて転倒したような、不慮の事故として土器を落下させてしまった状況を想定する方が合理的であろう。

さて、S X 5の北側は特に地形の大きな変化は確認されていないので、仮におよそ平坦な空間が広がっていたとすると、その平坦地ではなくわざわざ淀みに近い斜面を、一抱えもあるような土器を携えながら傾斜に直行したまま東西方向へ進んでいくのは、あまり得策ではない。むしろ、土器を落とした当事者は、土器を落とす直前は、意図的に傾斜と幾分平行するような方向を進んでいたと考えたい。そして、土器に内容物があるので土器を逆位や横位で携えていたとは考えられず、また走っていたとも考えにくい。また、土器の部位別分布に照らしてみると、その当事者はS X 5よりは西方を歩いていたと思われる。つまり、白川の北岸付近を西の下流方面から東の上流方面へと歩いている過程で、水際から斜面を上がって北東へ歩みを変えたか、水際を目指して斜面を下って南東へ歩みを変えたかして、斜面を斜行しようとした際に落下させてしまったのではないだろうか。

ここで、この落下地点S X 5近傍の地勢などを確認しておくとして、S X 5が臨む淀みの南側には中州のような礫堤があり、さらにその南側にはおそらく水無川か小川のような状態の白川の窪地ないし河道が東西方向にはしっていたと思われる。またS X 5の西30mでは、およそ北北東から南南西へと展開する高野川系流路と思われる氾濫原が確認されている⁽²¹⁾。つまり、白川系の流路と高野川系流路の氾濫原とが、S X 5の30m西方で交わって

おわりに

おり、おそらく先行する弥生中期のある時期には、そこは高野川と白川との両河川奔流の合流点になっていたこともあろう。ちなみに、最も近くにある同時期の遺跡は、上述のように、1 km離れてこの高野川（鴨川）の下流左岸に位置する吉田山西麓遺跡であり、東方では遺跡は未確認である。

さて、弥生中期末の暑くない季節にこの土器を抱えて歩いて来た当事者は、高野川系流路の氾濫原のある西方からやって来て、白川系流路に沿いながら東方へ向かう過程で、斜面の上方での東行きの歩みから東南方面へと方向を転じて50m幅の放棄河道を横切って行こうとしたか、あるいは水際での東行きの歩みから東北方面へと方向を転じて水から離れていこうとしたか、ということになる。遺跡東方での活動状況が全く不明なので、これ以上は議論を進められないが、20m東方での同時期の遺物の出土は、この辺りが、旧河道から離れて東北方面に進むか旧河道を横切って南東方面に進むか、どちらかの方向へ行くときの通過すべき分岐点ないし渡河地点であったことをうかがわせる⁽²²⁾。

8 おわりに

K S00S X 5が舞台となった人間行動についての解釈を、「いつ、どこで、なにを、だれが、なぜ、どうした」というかたちでまとめる。約2000年前の弥生時代中期末のある秋から春にかけての時季のあまり乾燥していない頃に、旧白川の河道跡の北側にできた放棄流路状の窪地の北肩斜面で、水のような液体が頸部辺りまで入った壺形土器を、いくぶん西方からやって来てこの斜面を横切ろうとした成人が、湿った地面に足を取られて、過ぎて腹付近から落として割ってしまった。その人は内容物を積極的に回収しなかった。そしてそのまま放棄された土器破片は、水や小動物などによってやや位置移動したものが数点あるものの、多くはその着地地点をしばらく保つ。その後、シルトのような小粒径の土砂移動をともなうそれまでと同様の堆積環境下で埋没した。

さて、本論で試みた分析と解釈は、考古資料の現場検証的な分析と民族誌的な解釈に過ぎず、警察の科学捜査には及ぶべくもない分析であり⁽²³⁾、弥生時代史の構築には直には貢献し得ない解釈である。しかし、条件設定が困難ゆえに体験の累積による実験的追証が困難な壊滅的破損という現象ではあっても、出土から遺物復元までの情報の収集の仕方によっては、その破損の現場から導く復原的解釈の幅をかなり限定できるという可能性、さらに大胆に言えば、過去の間行動をその場で目撃したかのように復原し得る、そういった可能性は示し得たと思う。物的証拠だけでなく「現場でしか得られない」状況証拠も丹

念に収集してその両者を複合的に解釈すれば、目撃者情報がなくても、過去の人間にかなりの所まで迫ることができる。

発掘現場ではいろいろな遺構に遭遇するが、過去の人間による様々な遺構での様々な行動を丹念に復元的に集積していけば、それを基に歴史的に時代像を描くことにも、人類学的に行動論を展開することにも、可能性は大きく広がる。そのための日々の実践として、現場の調査者にしかできない重要な野外作業としての「状況証拠」の収集と、遺物の製作から破損までを視野に入れた屋内整理作業がもたらす「物的証拠」の収集とを、バランスを維持しながら推し進めていくことが重要であることは言うまでもない。

謝 辞

東京都埋蔵文化財センターの川島雅人さんには原位置論の歩みに関する文献検索で、香川県埋蔵文化財センターの信里芳紀さんには弥生土器に関する文献検索で、京都府警察本部科学捜査研究所の寺田信夫さんには警察の科学捜査に関する文献検索で、それぞれ大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 遺跡形成については、旧石器時代の遺物分布に関して既に議論のあった日本でも、シファールの遺物移動に関する研究に触発されつつ、阿子島香、塚田良道、御堂高正・上本進二らをはじめとして積極的に研究されてきているし、原位置情報のある接合資料の分析を基礎とした行動論においては、前原豊・川島雅人、阿部芳郎、高橋章司、小林謙一・大野尚子をはじめとして、製作・使用・廃棄の段階を問わず、幾つもの成果があがっている。

Pitt Rivers (A. Lane Fox), 1877 'Opening of the Dyke Road, or Black Burgh Tumulus, near Brighton, in 1872'. *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 6, pp.280-287.

麻生 優 1959「神山遺跡とその発掘調査」『神山』（新潟県津南町教育委員会）。

樋口清之・麻生優 1971『十三菩提遺跡』（神奈川県埋蔵文化財調査報告2）。

加藤晋平・宇田川洋 1973「考古学と民俗学の間」『物質文化』No.21, 24-40頁。

麻生 優 1975「「原位置」論の現代的意義」『物質文化』No.24, 1-14頁。

前原 豊・川島雅人 1976「第9号住居址と出土遺物」『長野県佐久市市道遺跡』佐久市教育委員会, 149-203頁。

Schiffer, Michael B., 1976 *Behavioral Archaeology*. New York, Academic Press.

阿子島香 1985「石器の平面分布における静態と動態 —実験的研究—」『東北大学考古学研究报告』1, 37-62頁。

塚田良道 1985「石器群の原位置性・一括性に関するノート」『旧石器考古学』30, 69-84頁。

- 御堂島正・上本進二 1987「遺物の水平・垂直移動 ―周水河作用の影響に関する実験的研究―」
『神奈川考古』第23号, 7-29頁。
- 阿部芳郎 1998「遺物のライフサイクルと廃棄ブロックの形成過程」『上土棚南遺跡第3次調査』
(綾瀬市埋蔵文化財発掘調査報告5) 127-141頁。
- 高橋章司 2001「翠島園遺跡の技術と構造」『翠島園遺跡発掘調査報告書 ―旧石器編―』(羽曳
野市埋蔵文化財調査報告書44), 192-221頁。
- 小林謙一・大野尚子 2002「土器と遺構のライフサイクル ―縄紋中期集落遺跡を読み解くため
に―」『民族考古』第6号, 1-37頁。
- (2) 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005「京都大学北部構内B C 28区の発掘調査」『京都
大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』, 133-208頁。
- (3) 伊藤淳史 2000「山城地域における弥生集落の動態」『みづほ』第32号, 58-73頁。
- (4) こうした観察項目は既に報告されている(富井 眞 2005「S X 5の原位置論的検討」『京都大
学構内遺跡調査研究年報 2000年度』194-202頁の表14と図版49)。以下、本文ではこの観察所見
に依拠した分析をおこなう。
- (5) 清水芳裕・古賀秀策 1997「京都大学北部構内B B 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研
究年報 1993年度』, 41-52頁。
- (6) 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995「京都大学北部構内B A 28区の発掘
調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』, 65-125頁。
- (7) 千葉 豊 1998「京都大学北部構内B F 34区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報
1994年度』, 34頁の図22。
- (8) 後述するように、破片の部位別分布にある程度の規則性があり、口縁から底部にかけて順次西
へ分布している点も、土器片が水流によって二次的にもたらされた可能性を否定する。
- (9) 実際の破片には、これらをまたがって含むものもあり、その場合には適宜どちらか一方の分類
群に帰属させている。
- (10) 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005「京都大学北部構内B C 28区の発掘調査」『京都
大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』の179-180頁(Ⅱ287番の土器)。
- (11) この部位におけるケズリ状痕跡は、ハケメを施す原体と同じ工具によるもの、外見上の砂粒の
動きの差異は粘土の含水状態に起因するもの、と判断したい。
- (12) 仮に型を利用して製作しているとしても、粘土板を水平方向に接いだもの、あるいは粘土塊を
押し広げながらも最終的に水平方向に器厚を整えたものが作られていることになるが、この個体
では、型作りを積極的に支持するような痕跡、すなわち内面に数多く残る指頭圧痕や外面の剝離
用材痕、そういった痕跡も見受けられない。
- (13) 西田泰民 1999「縄文後期土器の使用痕について」『祇園原貝塚』(上総国分寺台遺跡調査報告V)
市原市文化財センター, 1121-1125頁。
- (14) 千葉 豊・阪口英毅 2005「京都大学吉田南構内A N 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査
研究年報 2000年度』の28頁。
- (15) こうした形状面での対照は、後述するように、破損の瞬間の衝撃を反映していると思われるが、
異なる部位どうしでの差異という点で見れば、分割整形の単位とも関係するだろう。
- (16) 阿部芳郎 1998「遺物のライフサイクルと廃棄ブロックの形成過程」『上土棚南遺跡第3次調査』
(綾瀬市埋蔵文化財発掘調査報告5) の130-131頁。
- (17) 例えば、平板なガラス板の場合ならば、破損開始点から亀裂が放射状に走り、ガラス瓶の場合
でも、最初の破損開始部に破損幹線がおよそ収斂する(柏谷一弥編 1983『捜査のための法科学』

- (法科学シリーズ(2)音声・火災・爆発・機械・交通・銃器, その他)の340-346頁)。
- (18) 阿部芳郎 1998「遺物のライフサイクルと廃棄ブロックの形成過程」『土土棚南遺跡第3次調査』(綾瀬市埋蔵文化財発掘調査報告5)の141頁の註4。
- (19) これらの7つの群のうちで、破損幹線に明らかに一致しないまとまりに属する破片は、A群に含まれる13番のみである。13番は、破損幹線に従えば、破損幹線を介して接合している12番を含むA群ではなくて、B群に入るはずである。しかし、出土位置をみると、部位的にも近接する12・103・33番に囲まれており、また13番自身が二次的に移動したと想定する積極的な根拠がないので、それら3点の帰属するA群に含まれると考えるべきである。この13番については、総合的な解釈が困難であるが、13番と12番との接合部が含まれる破損幹線がその上方で分岐していることが、何らかの作用を与えているのかもしれない(図166)。破損幹線がそこから分岐するということは、先に推測した、底部から発した蓄積疲労ないし潜在的ひびが、この辺りよりは下位で止まっていたことが予測されるからである。
- (20) その後については、おそらくダム湖が決壊して、この辺りに溜まった水は、中州的な砂礫層の堆積物は移動させない程度で、かつ北岸のシルトが緩やかに流されてそこに再び土手が形成される程度で、流れ出ていったのだろう。SX5はバックされていたものの、SX5の上位にそれと同様の勾配でシルトが残存する。そして、白川はもうここを流れなくなって、その状況が維持されて、植物が繁茂し、SX5の上位が黒灰色粘質土層へと変化していったのだろう。
- (21) SX5の検出時の調査で確認された、「SR3」の下部の礫層(伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005「京都大学北部構内BC28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』, 133-208頁)。
- (22) 内容物が通常の水だとすれば、わざわざ遠く西方から運んで来るよりは、むしろSX5の南方の白川の流水ないし湧水を汲んで来て、南方から北方へと歩みながらこの斜面を上がっていたと考えるべきであり、また集落や作業場などからわざわざ白川へ捨てるためにこの斜面を下っていたとは考えにくい。(SX5付近の淀みの水や南の礫堤のさらに南方の流水を汲んで来るとすると、集落などに井戸はなかった可能性がある。)しかし、内容物を確定し得ないので、ここではとりあえず、水でない場合も許容し得る解釈を示した。
- (23) 古くからしばしば、考古学の発掘調査は犯罪捜査と対比されるが(例えば、樋口清之 1963『発掘』(學生社)の10-13頁)、最近の警察の科学捜査では、物質の破損についてはあまり研究が多くはないようである。